寺紋
柊（ひいらぎ） かこみ沢瀉（おもだか）
（通称 大関沢瀉（おおぜきおもだか））

大雄寺報

＝第２号＝
平成15年１月１日発行
発行所 黒羽山 大雄寺
〒324-0233
栃木県那須郡黒羽町田町450
ＴＥＬ　0287－54－0332
ＦＡＸ　0287－54－0330
編集発行人 住職 倉澤良裕
印刷所　タキザワ印刷

大雄寺の伽藍

本堂・庫裡・禅堂・廻廊・総門・鐘楼堂、これら全てがカヤ屋根で保存され、室町時代の伽藍が残っております。
昭和４４年栃木県文化財指定を受け、全国でもたいへん珍しい寺院であります。
檀信徒の法要はもちろん、「開かれた寺院」として、多くの参拝者を受け入れた法話説法、また、禅堂を開放して坐禅研修が行われる心身の修養道場でもあります。

杉木立の山道を一歩一歩登りつめ、羅漢さまや合掌観音さまに迎えられ、心の引き締まりと平静を取り戻し、満ち満ちた仏の教えに包まれ、目の前に現れてくる大伽藍に自然と、そして、素直に‥‥手を合わす‥‥
大雄寺が守られてきた長い歴史の佇まいと清浄な空気がここにあります。

和の響き『尺八と箏の演奏』

大雄寺和の響きに寄せて

黒羽向町　鈴木　和雄

目覚めて鎧戸を開けると朝の光が雪崩れ込み、緑は戦ぎ花は香る。幸せな気分で朝のセレモニーを済ますともう九時、さて、おめかしを・・。オフホワイトの襦袢に鼠色の薄いセルの着物、帯と足袋は黒で締めて御出発。敷石に和装靴を響かせてゆっくり歩く。

那珂川歩道橋の下には川遊びの人達が楽しそう、彼方此方に鯉幟が泳いでいる。

大雄寺に着くと顔見知りの誰彼と挨拶。皆明るく美しい顔をしている。

友達と連れ立って本堂に入り定番の五味糖を頂く、歩いて乾いた喉を甘く滑らかにしてくれる。

待つ間も無く開演。司会者の滑らかな進行で出演者の紹介、曲の説明があって、演奏に入る。最初は、和久文子の琴、西村的山の尺八で『春の海』。瀬戸内の鴎では無く、那珂川の千鳥を古刹の庭に聞く思いでした。

二曲目は的山・的竜山父子の『叢雲』。先ず驚いたのは、尺八が見事にハモった事で、古典即ち超現代音楽と思わせられました。

和久文子の『六段』。よく知られている曲なので、エキセントリックにと思いきや、素直で美しい八橋検校の世界を見せてくれました。白地に絵筆を走らせるように・・。

的竜山の『流露』。とても可愛い坊やのような面差しの若々しい青年が難曲を見事に演奏する。矢張り血筋なのでしょうか。

『風聞草（萩）』。和久文子の三弦、長峯朋子の十七弦、西村父子の尺八。三弦の鼓音、十七弦の低音に二本の尺八が微妙に絡み増幅する。庭の緑のせいか酔ったようになった。

『竹　五章』的山。『二つの幻想』琴、和久文子、長峯朋子、長谷川マキ。十七弦、松本勲子。この曲はもう現代音楽で、和楽器の可能性を見せてくれました。最後に一首。

●アンコールは琴と尺八のエルクンバンチェロ古刹の庭に躑躅が燃える

大雄寺牡丹と和の響き

黒羽田町　伊藤　昭典

父よ母よ「和の響き」届きましたか。お二人がみ仏の許に旅立たれてから、もう十年余になりますね。私たち夫婦元気に過ごしております。今日は「大雄寺・牡丹と和の響き」と題し、「尺八」と「箏」の演奏会があり、お寺へ行きました。お寺はあの頃と変わらず、香華厚く静謐満ちていました。寺運益々興隆に向かっており、ご安心ください。

さて、良裕和尚さんは「開かれた仏教」をと日夜心を砕かれておられ、私ども檀信徒の教化に尽くされ、その高邁且遠大な「大志」達成の一方便として、小にして大なる事業の開催であります。和楽器は幼より聴き慣れてはおりますが、和尚肝入りの今日の一日は、誠に感激しました。「尺八」と「箏」の共演は、まさに「竜の雲を得たる、魚の水を得たる」の感あり、ふたつの楽器は、時と処を得て夫々の本性を発揮して、あの広い本堂空間を、時に柔和な菩薩の音声にも似て、あるいは憤怒仁王の一喝の如く、相和しては是となり、相反しては非となって、しかも尚渾然と醸し出した音の世界。私の心がどっぷりそれに浸って忘我の時、突然浄土の父母のことが思い出されました。演奏中に何の雑念も起きぬとき、なぜ亡き人を思い出したか、思い出せる何があったのか。私にとってこの二時間の世界は一体何だったのだろうか。解けぬ思いと、感激の余韻を持ち帰りました。蓮の掌の父母が「自分たちもお前と一緒に美しい和の音楽を聴いているよ」そうか、これだ。父母も一緒に聴いていることを私に知らせていたのか。「和の響き」が父母の許へも届いていたのか。嬉しく有難いことではないか。

「和の響き」により私はまたとない得がたい体験を戴いたことに深く感謝申します。いまみ仏の深い慈愛に包まれ、仏道に励んでおられる私の父よ、母よ、成仏の一日も早かれと祈っております。

南無釈迦牟尼佛

牡丹花のさゆるぎさそふ和のひびき

万緑葷酒の掟和の響き

合掌

「大雄寺牡丹と和の響き」尺八と箏の演奏を聞いて

郡山市　内田　美穂

お天気に恵まれた五月十二日、尺八と箏の演奏ということで、どんな演奏が聞けるのだろう、とわくわくしながら大雄寺を訪れました。

箏曲の中でもベーシックな「春の海」から始まり、最後のアンコール曲では現代音楽で終わる、という幅広いコンサートでした。

大雄寺の厳粛な雰囲気と境内の木々の緑とあいまって、尺八と箏の音色が凛とした空気となり、会場全体を包み

込み、たとえようもない素晴らしい演奏会でした。

このコンサートでは、通常の十三弦箏だけでなく、ひとまわり大きい十七弦箏の演奏も聞くことが出来ました。私は十七弦箏の演奏を始めて聞いたのですが、優雅なイメージのある箏からは想像もつかないほど激しい弾き方に驚きました。立ち上がって左手を伸ばして演奏する姿に息を呑む思いでした。

また、アンコール曲では、現代音楽を尺八と箏で演奏したらどのようになるかということでしたが、日本古来の美しい音楽と、現代音楽の融合を感じることが出来たように思います。

今回大雄寺で尺八と箏の素晴らしい演奏を聞くことによって、落ち着きのある空間と風情を感じることができました。まるでフルートやハープでも弾いているのかのような華麗な演奏と、優雅なイメージからは、とても想像のつかない力強い演奏が重なり合って、音響や雰囲気も抜群という効果もあり、より一層の感動を得ることができました。

素晴らしい演奏を聞かせていただき、ありがとうございました。

「大雄寺牡丹と和の響き」に参加して

大田原市　田代　純一・禮子

早足で駆け抜けていった今年の春。大雄寺の牡丹も例外ではありませんでした。いつもの年なら庭一面に牡丹が咲き誇る五月十二日、コンサートの日になりました。それでも山道のシャガの花が私たちを迎えてくれました。

コンサートは、箏と尺八の演奏です。客は本堂に背を向けて座り、演奏者が目の前に向かい合わせで演奏するという、まるで自分ひとりのためのコンサートのような気さえしました。曲目は「春の海」や「六段の調べ」のように馴染み深いものから、あまり耳にしたことのない曲まで幅広く、その素晴らしい音色は、目を閉じて聞いていると「今、自分はどの時代にいるのだろうか。」という錯覚に陥ってしまいそうでした。

それはまさに、六百余年の歴史に佇む大雄寺で、時折鳥の声も聞こえる緑多き大自然の中で、悠久の時を経てきた箏と尺八の響きという取り合わせの一体感が、そうさせてくれるのだろうと思います。

日々の雑事の中で忘れかけていた魂を原点に帰してくれるような演奏会でした。

追記

境内の廻廊に囲まれた本堂前の庭園に、期待していた牡丹の開花を眺めながら、鑑賞できたら最高ではなかったかと思いつつ、雑踏に追われる昨今、まさに温故知新の心境に癒しの一日を過ごすことが出来ました。

有意義な思い出作りができ、関係者の尽力に感謝いたします。ありがとうございました。

「和の響き」

白河市　深谷　令子

久しぶりのさわやか五月晴れのきょうは
日本古来の美しい音色の心和む時間の
なかにゆったり
歴史の重みと自然の風や音の雰囲気が
ぴったり納まった重厚な
それでいて優しいたたずまいのなかで
の時間をありがとうございました
長い歴史あってこそ、醸し出される雰
囲気のなかに
花々も樹木も生き生きと、まさしく自
然との共生・・・

会場までの往路、連れと奥州街道の一里塚や芦野の宿場、岩観音や芦野城、白河城主だった松平定信公ゆかりの聖天さんのお寺とか、伊王野の霞ヶ城道の駅のまつりの館で山車見たり、東山道のことなど、ぶらぶら散策して早めに到着。

・・大雄寺様、歴史のあるお寺の存在、いまさらながら、日本の歩んできた歴史の素晴らしさに感動です。

こういうことを次代に生きる子供たちに、しっかりと伝えたいねと改めて感じました。

私はいま、語り部として勉強中
イベント出番あるときは歴史語りを織り込んだ昔話をテーマに取り込んでいます。

きょうは、古来の音色の中で新しい発見いろいろでした。

歴史ある黒羽界隈も私風の語りに興してみたいと考えます。

白河の歴史につなげて語れるようになったら素敵ですね。

これからの活動目標にしようと思います。

昨年はちょうど牡丹の見ごろに伺いましたので、庭一面の見事な牡丹の花が目に焼き付いていて、拝聴している間、満開牡丹のイメージを膨らませることができました。

お庭を借景に、いにしえ人になって、思い出です。

ここのところの天候不順に体調維持、四苦八苦でしたが、元気の素をたくさんいただきました。誘った友人知人たちもたいへん喜んでくれました。

ご案内ありがとうございました。お礼まで

合　掌

東堂倉澤良一老師藍綬褒章受章す

受章者紹介

倉澤　良一

現住所　〒三二四―〇二三三
栃木県那須郡黒羽町大字黒羽田町四五〇番地

生年月日　大正十四年四月十五日生（七十七歳）

受章者のあゆみ

昭和21年6月　黒羽町川田三五〇番地源昌寺晋山

昭和21年6月～昭和41年5月　源昌寺住職

昭和28年　民生委員、児童委員委嘱

昭和28年12月～昭和41年5月　民生委員、児童委員

昭和41年6月　黒羽町田町四五〇番地大雄寺晋山第三十六代を継承、保護司委嘱

昭和四十一年六月～平成四年五月　…大雄寺住職

昭和四十一年十二月～昭和四十六年十二月　…保護司

昭和四十二年　鐘楼改修、鐘楼堂落慶

大雄寺経蔵・輪蔵栃木県文化財指定を受ける

昭和四十三年　参道改修、護持会設立

昭和四十四年二月　本堂、禅堂、庫裡、廻廊、総門、鐘楼、御霊屋栃木県文化財指定を受ける

昭和四十五年　禅堂解体修理二ヵ年継続事業開始

昭和四十六年八月　人権擁護委員委嘱、禅堂落慶

昭和四十六年八月～昭和六十年三月　…人権擁護委員

昭和四十七年　手動防災設備設置

昭和五十年　本堂他四棟保存修理事業三ヵ年継続事業開始

昭和五十二年　本堂落慶・江湖会厳修

昭和五十三年　童話幼稚園（明星館幼稚園）設立、参禅道場認可

昭和五十五年　研修道場「月光館」新造

昭和五十六年　研修道場「月光館」落慶

昭和五十七年　教誨師委嘱、経蔵保存修理二ヵ年継続事業開始

昭和五十七年～現在　…教誨師

昭和五十八年　篤志面接委員委嘱、経蔵落慶、第五教区長任命

昭和五十八年～現在　…篤志面接委員

昭和五十八年四月～平成三年五月　…栃木県第五教区長

昭和五十九年　白幡不動尊移築

昭和六十年　新庫裡建設

昭和六十三年　新庫裡完成、庫裡保存修理事業三ヵ年継続事業開始

平成元年　庫裡落慶、自動防火設備事業三ヵ年継続事業開始

平成四年　退董式

賞典下付

昭和四十一年五月十日　民生委員　児童委員として厚生大臣賞表彰

昭和五十年六月二十七日　人権擁護委員として人権擁護連合会長賞表彰

昭和五十二年九月二十二日　人権擁護委員として人権擁護連合会長賞表彰

昭和五十三年十一月二十二日　人権擁護委員として人権擁護局長賞表彰

昭和六十年三月一日

人権擁護委員として法務大臣賞表彰
昭和六十三年六月十一日
教誨師として東京矯正管区長賞表彰
昭和六十三年十二月十四日
教誨師として黒羽刑務所長賞表彰
平成三年六月十一日
教誨師として東京矯正管区長賞表彰
平成五年九月二十一日
教誨師として東京矯正管区長賞表彰
平成八年十月三日
篤志面接委員として篤志面接委員協議会会長賞表彰
平成十一年六月十一日
教誨師として教誨師連盟総裁賞表彰
平成十二年九月六日
教誨師として法務大臣賞表彰
平成十四年五月十四日
藍綬褒章受章

お祝のことば

祝賀会実行委員長
大雄寺三十七代住職　倉澤　良裕

本日は、大雄寺東堂倉澤良一老師の藍綬褒章受章祝賀会を開催するにあたり、祝賀会実行委員会を代表しまして、心から御礼とお祝いの言葉を申し上げます。

この祝賀会開催にあたり、公私共にお忙しいところご臨席賜りました、黒羽刑務所所長 佐藤良彦様、黒羽町長 斉藤典男様、黒羽町議会議長 斉藤早苗様、多数のご来賓の方々をお迎えし、大雄寺檀信徒の皆様、源昌寺役員様、明星館幼稚園役員様、関係各位のご出席をいただきまして、盛大に祝賀会が開催できますこと、心より御礼を申し上げます。

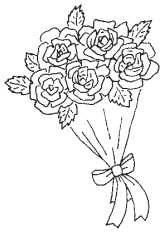
この度の東堂倉澤良一老師の栄えある藍綬褒章受章は、大雄寺三十六代住職として寺院の興隆に尽力されながら、黒羽刑務所教誨師として永年にわたり矯正教育にあたられた功績が認められたものであり、受章者のみならず大雄寺檀信徒一同、関係者にとりまして、この上のない喜びであります。

顧みますれば、昭和四十一年黒羽町川田源昌寺から大雄寺に入寺し、老朽化が進んだ堂宇を県文化財の指定を受け、七堂伽藍の保存に当たられ寺院護持と布教教化に尽力されました。

その傍ら黒羽刑務所教誨師として矯正教育に心血を注がれ、坐禅の指導や講話、篤志面接等の矯正教育に尽されました功績は、多大なものであります。

今後も十二分に健康に留意され、昨今の混迷を深める現在社会において、教誨師として更なるご活躍されますことをご期待申し上げまして、お祝いの言葉と致します。

平成14年6月29日　祝賀会にて



祝　詞

大雄寺三十六代東堂　倉澤　良一様

老師は今般春の叙勲において藍綬褒章受章の栄に浴されました
誠に慶賀に耐えません　檀信徒一同深く喜びとするところであります
よってここに金一封を贈り衷心よりお祝申し上げます

平成十四年六月二十九日

大雄寺檀信徒代表　佐藤　貢

お礼のことば

倉澤　良一

初夏の候　ご尊家皆様には益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

この度春の褒章に際しまして、はからずも藍綬褒章の栄に浴し、去る五月十四日法務省において伝達式、皇居にて拝謁と天皇陛下からのお言葉を賜り身に余る光栄と感激致しております。これ偏に皆様の多年にわたるご厚情の賜物と有り難く、衷心より感謝申し上げる次第であります。

思い起こせば、教誨師をお引き受けして十九年になりますが、常に自分自身に問い掛けながら教誨師として努めてまいりました。その間多くの方々に支えられながら励まされ、その任に当たってまいりました。

今後はこの栄誉に恥じることなく精進を重ねて参る所存であります。何卒従来にも増してご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

終りに皆様のご健勝をご祈念申し上げ、お礼の言葉といたします。

大雄寺宝物収蔵庫「大雄寺集古館」建設趣意書

謹啓　時下貴家におかれましては益々ご清祥の事、大慶に存じます。

当大雄寺は、黒羽藩主大関家菩提寺として創建され六百年の歴史を今に伝え、本堂・庫裡・禅堂・廻廊など諸堂全て貴重な文化財として栃木県の指定を受け、檀信徒の皆様と共に護持、保存に力を注いでいるところであります。

また、涅槃図や広凌観瀾図や枕返しの幽霊などの絵画、墨書、掛軸、木像、書籍、陶器、漆器、甲冑類など文化財指定・未指定のものを含め数多くの貴重な宝物を所有しておるところであります。

しかし、現在これらの宝物は、粗末な保存をやむなくされており、温度、湿度、火災、盗難などの点において万全の保存方法に至っておりません。

二百年、三百年を経てきた貴重な宝物を万全かつ安全な保存体制にして、私たちの子孫に正しく伝えなければなりません。

よって、種々の問題解決と安心を得られる宝物収蔵庫一部展示場を兼ね備えた建物を建設することを計画した次第であります。

この収蔵庫が完成しますれば、安全な格納と宝物一般公開が可能になります。また、皆様方が所有する黒羽に関する資料や宝物を預り収蔵することができます。

つきましては、檀信徒の皆様におかれましては、諸般の事情もあろう事と拝察致しますが、何卒報恩と仏心法愛をもって、特段のご喜捨を賜りたくお願い申し上げます。

合　掌

大雄寺住職　倉澤　良裕

記

一　鉄筋土蔵造り二階瓦葺き
一　工事予定　平成十五年度着工予定
一　経　費　総経費　四千万円
一　勧募方法　一口弐万円として二口

以上お願い致します。

●只今協力金の勧募受付中です。趣旨ご理解のうえ特段のご協力をお願い致します。

宝物収蔵庫「大雄寺集古館」建設にあたって

大雄寺は伽藍焼失することなく保存され、栃木県文化財指定を受けて護持しております。焼失を免れたため県文化財指定を受ける仏像や絵画のほか、未指定の宝物（仏像、仏画、大関藩主木像、絵画、掛軸、陶器、漆器、甲冑類、古文書、古書籍、刀剣類）など多く宝物を所有しております。しかし、現在は、納戸や押し入れ等に保管している状態で、湿度・温度や火災、盗難などに対しては万全の体制でなく破損の危惧と火災・盗難の危険を孕んでおります。

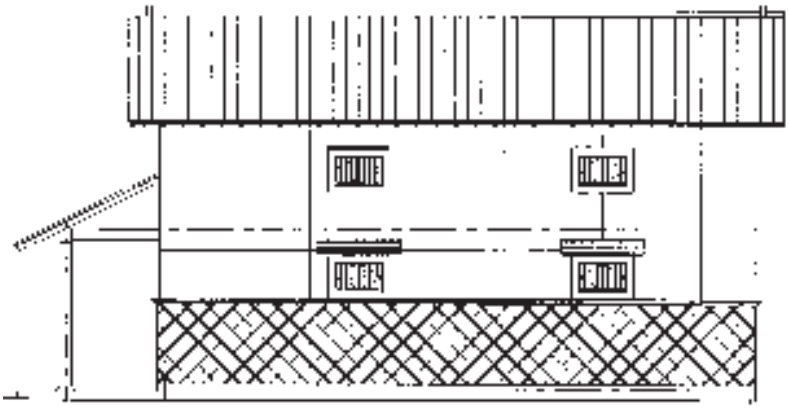
大雄寺所蔵の宝物の中には、黒羽藩の歴史資料や郷土作家の絵画等が多く残されているため、近年特に成人の生涯学習や小中高の学校教育における総合学習の教材として、大雄寺所蔵宝物の展示閲覧や学生による歴史研究資料提示の依頼が多いところであります。

また、個人所有の宝物を大雄寺に寄贈や寄託の依頼が、多く寄せられていることもあります。

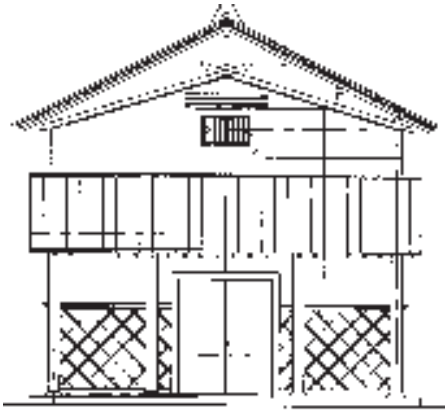
しかし、これらの宝物や栃木県指定文化財の宝物は、収蔵が不完全かつセキュリティーの不備から一般公開がされていないことは非常に残念なことであります。

安全かつ適正な収蔵庫が備われば、公開が可能になり黒羽の歴史や文化遺産の意識高揚に役立つものであり、県外、町外に流失してしまう可能性がある個人所有の宝物も預かることもできます。

よって、宝物収蔵庫の建設を計画した次第であります。この収蔵庫は、一階が宝物展示場で二階が宝物格納庫として機能する建造物とし、本堂や庫裡、禅堂などの伽藍と調和する周囲の環境に適合した外観で、内部は最新の空調設備とセキュリティーを施した収蔵庫を建設します。



南側　立面図　S＝1/100



西側　立面図　S＝1/100

檀信徒研修会

檀信徒研修会参加の感想

田町　坂本　邦雄

大雄寺さんには子供育成会、子供道場、昨年と今年の檀信徒研修とお世話になりました。講話の中で道元禅師が中国で厳しい修行の末、眼は横に二つあり鼻は縦に一つある「眼横鼻直」と言うことが分かったということを聞かされた。

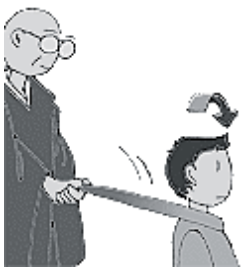
坐禅では入門として歩き方や姿勢などを教わりひたすらに坐る「只管打坐」を行じた。起きて半畳、寝て一畳の世界であるとの修行生活について知りました。坐禅は三十分程、方丈さんの「警策」の音で我に返りました。

作務については、「一日成さざれば、一日食らわず」の言葉を教えられ、本堂の廊下や坐禅堂の床を心を込めて拭き、自分の心が洗われ清々しい気持ちでした。

精進料理から食事の頂き方、器の扱い方などを教えていただき、合理的な作法に感心させられました。

方丈さんや奥様、料理作りのボランティアの方々のご苦労に感謝いたします。四時間ほどの休日のリッチな大人のひと時でした。檀信徒の皆様、是非軽い気持ちで参加されては如何でしょうか。大雄寺の本堂や月光館をサロンとして今までの人生、これからの人生語っては如何ですか。

合　掌



檀信徒研修会参加の感想について

那須町　平田　寛

「坐禅」・・・それは、私にとっては長年に渡り、呪縛にも似た不思議な言葉として、脳裏を離れることはなかった。

その意識の始まりは、多分高校時代からだと思われるので、かれこれ五十年も前のことになるだろう。

当時、私は浄土真宗のお寺に下宿し、門前の小僧のような生活をしていたので、宗門の環境の影響もあったのだろう。

その後、実社会に出てからは、高度経済成長期の大きな歯車の中に全てが埋没し、自我の意識も薄く、半世紀が過ぎた。

五十年前、「終の住み家」として那須に移り住み、漂泊の俳人松尾芭蕉の足跡を訪ね歩く中に、古刹黒羽山大雄寺との感動的な出会いがあった。静寂・清涼な境内の中に佇む、茅葺き屋根の七堂伽藍の禅寺。然も、私の生家と同じ曹洞宗。私は瞬時に呪縛から解き放たれ、現実の「坐禅」と向かい合う機会を得たのだ。

坐禅会入会後間もなく、「檀信徒研修会」のお話があり、即座に受講を申し出た。

開祖道元禅師のこと、坐禅のこと、作務のこと、読経・法話のこと、精進料理（五観の偈）などなどの過程を終え、「修了書」を頂いたが、私は、これを「入門書」と受け止め、有難く拝受することにした。

後日、生家の菩提寺主催「道元禅師七百五十回大遠忌」の参拝団の一員として、大本山永平寺を詣でたが、大雄寺での事前の研修会の経験が、大きな自信となり、今後五十年、二度巡り合うことのない私の大遠忌参りに、錦上花を添える研修であったことに深く感謝している。

合　掌

私の信仰

ご　縁

京都造形芸術大学客員教授
裏千家茶道教授・作家　三田　富子

月の三十一日には、黒羽の大雄寺を訪れ、墓参りをする。

お寺に着いて、あの坂をのぼってゆくと、何処からか、風野晴男先生が出て来られて、

「おお、来たか」

と、いってくれる気がする。私も手桶をさげ、墓への路をたどりながら、

「先生、来ましたよ、先生来ましたよ、私は元気です。」と声をかけながらのぼってゆく。

人と霊との会話は心の中で生まれる。

私が初めて大雄寺に伺ったのは、風野先生と結婚する十日前ほどであった。風野家は黒羽の大関藩の家老職の家で先生は十四代ときいた。

「大雄寺へ行きませんか」

とさそわれて、「はい」と返事して、先生のお供をした、昭和六十一年の秋である。

私は初めて見た大雄寺の幽玄、静寂を思わせる風情におどろき、しばらくたちつくしてあたりを見ていた。

「いいところですね」

と私が感嘆すると、先生が、

「いいところだよ　ここが終の棲家だよ」とおっしゃった。

終の棲家があるということは、生きていても安心ということである。

私は墓を拝み、「ここが」という念で胸がいっぱいになった。そこで、ご先祖様や奥様に

「これから、先生と共にくらしていって、よろしいでしょうか」

ときいた。古いお墓が並んでいるので、どの墓が答えてくれるのかと、見まわしていると、墓の中からでなく、高い樹の上から、

「わっはっはっ、よしよし」
といってくれたように思い、ほっとした。
　風野家は、平安時代からの古い家で、先祖は、藤原氏の一族京都から藤原氏の氏神、鹿島神宮の宮司として東へ下って来たようだ。
その宮司が残した子孫の一人が那須の郎党になり、源平の戦いに参加して、大八郎と共に九州へ渡り、大八郎が都へ帰ったあと宮崎の椎葉に残って、鶴富姫を護っていたようである。椎葉に風野家があった。
　先生が戦時中、知り合った風野という女性から聞いた話で、私は先生と共に椎葉村を訪れたが、その家は大阪へ転出して、現在は住んでおられなかった。
　風野家の先祖といわれる方は、風野嘉右衛門藤原勝明という方で、元和の時代の方である。徳川氏は元和時代、それよりも古い時代から伝わっていた伝統のある家を焼き討ちでなくしてしまったという。
私の家も、その焼き討ちに会って先祖は元和からなっている。
現在、風野を名乗る家は茨城に四十数軒あるが、栃木には先生のところ一軒である。
或る日、三越本店で社員の方から、
「風野先生、私も風野です」
といわれた、その方から聞いたところでは、茨城に本家が五つあって、それぞれに一族がいるという。平安の昔の宮司が残した人たち、長い月日、人が生まれ、育ち、家というものの中で生きて伝わることの、ふしぎさとおもしろさを感じたものである。
古い家だと感じ、いささか尻ごみの気分であった私は、墓に参って、ますます肩に重みがかかってきた。
　先生のお祖父様は、大関家の殿様で、お母様はその殿の七女ということである。すると先生は、殿の孫。その孫と平然と話をし、その嫁になろうとしている私は何、と思うと、身も気もかたく沈んでしまう。
そんな気持ちでいるとき、大雄寺の和尚様がお出ましになって、いろいろと話をして下さった。そのうちに、心が和み、嫁に行くという重みがなくなって、何となく「嫁にいってあげる」という気になってきた。
帰り小学校の前を通った。
古い門があった。
「この門が風野家の門だよ」
と、いわれて、またまた、すごいなと思ったが、藩政時代の門が残っているだけで、栃木の黒羽というところの、人の心が感じられた。
　それから十日後、長崎の諏訪神社で、結婚式をあげた。衣冠束帯と十二単衣の二人。
先生八十二歳、私六十二歳。そんな結婚式は珍しいと、テレビや新聞でさわいだが、二人は一向に平静。
結婚後、報告のために大雄寺を訪れた。
私は後妻なので、奥様に
「先生をお守りします」
と一礼。あれから十七年。歳月はとどまらず、
今年は先生の七回忌である。
私は此のごろ、ご命日にお寺へ伺って、和尚様とお話をするのがたのしく、私にとってお寺は唯一の、心の休まるところである。

大雄寺との出会い

那須町　小村　直公

　秋の紅葉はあっという間に終わり、那須の茶臼岳は雪を被り、例年よりも早い冬の到来となりました。ちょうど四年前の水害のあった年に、山が眺められ温泉に入られるところと思い探した結果、那須町湯本に第二の人生を過ごすことに決め、一年程は新幹線で東京まで通い、退職後の二年目からは仕事に就かずぶらぶらしておりました。退屈な生活に飽き、大田原の某会社にパート勤めすることとなり、その仕事の関係で大雄寺さんを紹介して下さった浅倉石材の浅倉社長さんとの出会いでした。寺への山道を登り、山頂に佇む本堂、木々に囲まれたお墓を見せてもらい、大雄寺住職倉澤さんにお会いさせていただき、いろいろとお話も聞かせてもらいました。この大雄寺さんに家族を見届けてくださる寺として住職さんにお願いしたところ、心より内諾をいただき大雄寺さんの檀家の一員となることができました。幸い実家（青森県八戸市）も曹洞宗で、何かの縁かと思っております。
　その帰りに住職さんより「禅の友」の冊子三冊いただいて、読んだ冊子の最後のページに曹洞俳壇の欄があり皆様の投句に感銘を受け読ませてもらいました。その後自分も俳句を勉強してみようかと考えていた折、平成十三年一月号「禅の友」に前総持寺貫主板橋興宗さんの新年のお話の中に『修行とは坐禅でもよい。お念仏でもよい。散歩でもよい。お仕事でもよい、自分の納得のゆくことを余念を交えずに、からだごと打ち込むことである。』
との一節を読み、よーし今年から「自分の修行」と掲げて、頭の修行に俳句、手の修行に陶芸、足の修行に山登りと渓流釣り等に発心させてもらいました。
それから一年になり、それぞれの修行の過程において、心に留めたことを恥ずかしながら詠ませていただきました俳句を、この欄をお借りして一年間の結果を紹介させていただきます。

●第二十一回柳まつり全国俳句大会
　　仁尾正文　選

★古き代の田歌聞ゆる柳かな
（芦野の遊行柳には、二度ほど通りかかり何か子供の頃田舎の田植えを思い浮かべ年寄りの田植え歌が聞こえてくるような思いがしました。那須町より初めての賞を受ける。）

●曹洞俳壇　坊城としあつ　選

★熊笹を分けて分け入り山女釣
六月号

（白戸川の上流で笹をかき分け、かき分け初めての渓流釣りの思い出です。今年の収穫三〇匹程）

★山びらき捧げし祝詞（のりと）風となり
八月号

（初めて山開きに参加し二百名程の登山客、山頂は晴れ渡り雲海の上での山開きでした。今年茶臼岳、朝日岳等六回程登頂する）

★どの牛も刻（とき）を余して夏野かな
九月号

（安愚楽牧場から牛の長閑な群れを眺め、遥か遠くに八溝山が連なる夏の日でした）

尚、大雄寺檀家の皆様と道元禅師七五〇回大遠忌の永平寺参拝旅行に夫婦で同行させて頂き誠にありがとうございました。永平寺を囲む山々も雪模様に変わっていることでしょう。

大きな建物、長い廊下、広々とした本堂、止まることのない大勢の修行僧目に浮かびます。

大雄寺さんとの出会いは、皆様との出会いと思っております。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻の程をお願いいたします。

大雄寺住職さんありがとうございました。

合　掌

俳句

黒羽田町　黒沢　千恵子

棺添えの顔に土用の汗光る
どくだみの根ことごとく涅槃の図
木犀のかほり写経の行に入る
梅雨上る十六羅漢正座して
鮎の香の炉端めぐりて無口なり

石仏十六羅漢

ご詠歌教室

毎月二回ご詠歌の練習に励んでいます。年一回梅花流栃木県奉詠大会が、鬼怒川あさやホテルで行われ、今年で三回目の大会出場です。まだ日が浅いのですが、声がそろって立派なお唱えでしたとお褒めの言葉をいただきました。

栃木県奉詠大会出場

写経の会

毎月第一火曜日午後二時から、研修道場月光館で写経を行っています。毎年十二月十八日は、一年間の写経を納経する法要「観音祈願法会」を合掌観音像において行っています。

一口法話

供養の心

仏事法要とは、読経し回向する供養の法要をいいます。主に寺院が努める法要と個人が施主になって法要をいとなむ場合とに分かれます。

寺院が主催する法要、例えば六月八日の「大般若法会」や十月一日の「大施食会」などを法会と呼び、檀家の施主が亡くなった人やご先祖の供養をいとなむ法要を法事と呼んでいます。

そこで供養とは、仏前に食物や香華をささげ、読経し、亡くなった人を弔うことを意味しますが、その供養の心とは、次の三つの心があることを教えています。

一　利の供養・・・香、華、灯明、浄水、飲食を供える。

二　敬の供養・・・仏前を荘厳し、敬う心、まごころを供える。

三　行の供養・・・仏の教えを受け入れ、感謝と誓いをもって日々の生活を実行する。

この三つの供養が一つの心になるよう真心をこめてつとめることが大切であります。

『眼閉じ　み名呼べば　さやかにいます　わが前に』

ところで、仏事法要は正座がつきものです。最近正座が苦手とか、短い時間でも足がしびれてしまうなど正座が困難になっています。

ご仏壇の前で、あるいは本堂で、なぜ正座をするのでしょうか?正座とはあらたまることです。折り目を正すことであります。日常的ななれなれしい気持ちを切り替えることが正座ですから、正座になれば、仏様の前であらたまった気持ちで拝むことができるのです。

大雄寺本堂では、しびれが少なく、正座しやすい座椅子を用意しています。たいへん有難いと喜ばれています。背筋を伸ばし体を整え真っ直ぐに座ることは、心を落ち着かせることができます。

「威儀即仏法」という禅語があります。「形は、すなわち、仏の教え」形を整え、息を整えて心を整えることということです。「形は心をつくり、心は形となる」のです。

●合掌について

合掌は、身も心も仏の前にすべてを投げ出して、仏の慈悲の光に照らされている姿です。合掌が日常生活に自然と身につき、思いやりの心が育むことでしょう。

合掌の仕方は、指と指の間を離れず指を合わせ、右と左の掌をぴったりつけ、中指の指先が鼻の高さにくるように、顔の前、手一握り開けたところにきます。

「右　仏、左はわれと合わす手の、内ぞゆかしき、南無の一声」

●焼香について

焼香は仏への供養の形です。「お香は信心の使いなり」という言葉があります。お香を焚けば、その煙や香りが仏前を荘厳するばかりでなく、私たちの身と心をも清らかになります。

焼香の仕方は、はじめに仏前で合掌礼拝し、「初香を念じて、従香を念ぜず」といわれますので、一回目を「初香」といい、左手は合掌で、右手で香をつまみ、額のあたりにいただき、念じ、香炉に焚きます。二回目は「従香」といい、香をつまみ、いただかず香炉に焚きます。従香は、初香で念じた心を加える意味があるのです。終わって合掌礼拝して焼香を終えます。参会者が多いときは一回のみでよいでしょう。

●読経について

曹洞宗開祖道元禅師さまが示された聖典『修証義』を一緒に読経します。この修証義は、第一章から第五章までありますが、声を出し一緒に唱和。第五章は「行持報恩」という教えがあります。行持とは、日常生活のこと。報恩とは、感謝の気持ちです。毎日の日送りをいつも心を清浄にして感謝の気持ちで過ごし、信仰を持って生きる教えであります。

私たちは仏事をとおして、信仰に生きる人になりましょう。

●回向について

「えこう」と読みます。読経の後必ず回向を唱えます。意味は、「自分の積んだ善根功徳を他のためにめぐらし振り向けること」と解釈します。

自己の積んだ善根、善行功徳をまず他のために、他の衆生の菩提のために回向することで、利他の願いであります。回向するには、自ら何らかの善根を積むことが必要であります。そのような善根とは、さまざまな浄行がありますが、仏教経典から受持・読誦・解説・書写などと示されています。

したがって、読経後回向を唱えることは、自己および他の衆生のために利益を差し向けることと解すことが出来ます。

一般的な回向文「願わくは此の功徳を以て普ねく一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に仏道を成ぜんことを」・・・「願いますことは、この善根功徳をもって普くすべてに及んで、自己と他者あらゆる人々と共に仏の道を成し遂げられますように」と回向を唱えます。

天童寺参拝の旅行記

中国天童寺参拝の旅へ

大雄寺住職　倉澤　良裕

大雄寺主催海外交流「中国天童寺参拝の旅」は道元禅師七五〇回大遠忌記念として、檀信徒に呼びかけ二十名の団体で、平成十四年十月二十一日から五日間の中国寺院の参拝を実施することができました。

天童寺・阿育王寺・雪竇寺・浄慈寺・霊隠寺を拝登し、いずれも住持もしくは監院老師と親しく懇談し、法要に臨み諸堂拝観をすることができました。

実は、それぞれの寺院に特別な受け入れをしていただく旨をお願いできたわけは、浙江省仏教会理事の殷勤先生と知り合っていたからであります。

平成十三年十月「東皐心越禅師足跡巡拝の旅」に参加した際にいろいろお世話を頂いたご縁からであります。

今から三〇〇余年前のこと、東皐心越禅師は一六三九年中国浙江省浦江県に生まれ、三七歳日本に来訪。一六九三年（元禄六年）五五歳のとき、大雄寺を訪問し大雄寺十三代廓門貫徹和尚と親しく面会。その際、現在も保存されています「学無為」と「霊鷲」の篆書額、「達磨図」「乗龍観音・梅・竹」の絵画を廓門和尚に贈った史実があります。

「東皐心越禅師足跡巡拝の旅」は、心越禅師三〇〇年を記念して浙江省浦江県に記念館が建設され「心越記念館」の開館式とシンポジウムに出席する機会を得た日中友好の旅でありました。

「来年、是非大雄寺のお檀家さまと一緒に中国に来て下さい。曹洞宗の関係寺院をご案内します。」と暖かい言葉を掛けてくださった方が殷先生でした。

その後、時々メール交換をしながら準備を進め、幸い平成十四年九月中国仏教会の方々と共に通訳として来日し、永平寺を参拝され、その後大雄寺と訪れ、再会をしました。

三〇〇余年前に遡った尊い出会いから殷先生と知り合い、七五〇余年前の道元禅師のご縁で私たちは天童寺参拝が感動の旅となったのであります。

ご一緒した檀信徒の方々の思い出の感想文を紹介して感動の旅をお伝えいたします。

道元禅師さまを偲ぶ　感動の旅

大田原市　足立　祐二

［はじめに］

大雄寺さまのお誘いにあずかり、曹洞宗開祖道元禅師七百五十回忌記念五日間の旅に参加することができた。

大雄寺さまのお知り合いである殷勤先生にご案内をいただいたので、各寺院では特別の受け入れをいただくことができた。殷先生は杭州市仏教協会の重鎮であり、仏教研究員として永平寺とも深い係わりがある方である。

殷先生は永平寺に所用があって訪日された機会に大雄寺までお立ち寄りになり、今回の旅について事前説明をしてくださった。流暢な日本語には驚かされるとともに、殷先生にご案内いただけることに大きな喜びと希望を抱くことができた。

中国の各寺院に行くと重要な建物には参拝者の立ち入り禁止を意味する「遊客止歩」の標示が数多くあった。ごったがえするような参拝者達が不思議そうに見守る中を、私たちは寺の案内僧と殷先生の後に続いて「遊客止歩」の建物に入っていくのである。また、客堂に案内され、茶菓の接待を受けながら高僧からお話を伺うことができたのである。

参拝した禅寺について記します。

［雪竇寺］

寧波から二時間ほど走ると静かな町並みに入る。蒋介石総統の故郷である。バスは曲がりくねった坂道をどこまでも登っていく。眼下には浙江省の雄大な平地が見え隠れする。全く人家のなかった山道を登りつめると忽然として大きな寺院が姿を現した。「天下禅林十大名刹　雪竇寺」である。開山以来千六百年の歴史を誇り、僧侶六十人を擁する名刹である。住職は三十二歳にして中国仏教界の要職の地位についた名僧である。この名刹もご多分にもれず文化大革命で破壊され改革開放後に再建された。

大雄宝殿に安置されている「南無娑

婆世界本師釈迦牟尼仏」は一九九八年八月に建立された。大きな大きなお釈迦様であった。

［阿育王寺］

建立より一七二〇年、広大な敷地に仏殿・法堂など多くの伽藍や塔が雲をつく老松に囲まれ、折からの霧の中に浮かぶ姿は荘厳そのものであった。日本の管長職に当たる釈界源住持さまのご説明によると寺は文化大革命で破壊されたが改革開放政策後は国費によって最初に再建された寺である。現在は一二〇人の僧が修行中で総勢二五〇人が住んでいるという。

住持さまのお声は客堂に吸い込まれるような静かな語りかけであった。

奥の院に行くための階段は百段にも及んだ。もうここには「遊客止歩」も撮影禁止を意味する「禁止拍照」の標示も無かった。ごく限られた人達が昇殿を許される崇高な場所であり、参拝者が近寄ることができない聖域なので、それらの掲示は全く必要がないからである。全員が大雄寺からいただいた輪袈裟をかけ、足音をしのばせて最上階に上がって履物をぬぎ、お釈迦さまの前に座った。五十センチほどの銅製の体内に青白く光るものはお釈迦さまの仏舎利(分骨)であった。

大雄寺ご住職と殷先生が般若心経を唱えられ始め、全員合掌して礼拝した。身の引き締まるひと時であった。殷先生のお計らいによりフラッシュ撮影も許された。ちょっと厚かましいかなと思ったが、高僧のにこやかなお顔を拝見してほっとした。

昼食には時間をかけて調理した精進料理をいただき一同大喜びであった。

［天童寺］

写経納経法要（天童寺にて）

明の時代に遣唐使十九回、遣隋使四回が上陸した寧波からバスで五十分程の所にある今回の旅のハイライト天童寺。天から童子が舞い降りてきたことからこの名が付けられたという禅寺である。

道元禅師は寧波からこの地を流れる小白川を逆上って天童寺に入られたという。

その川のある小白村に来ると、樹齢千余年は経っているであろう「万松狭道」と称せられる赤松の並木が参道沿いにずっと続いている。樹間に余裕があるので、どの松も文人模様で、盆樹の手本になりそうな風情を醸し出している。寺の坂道沿いにはみかんもたくさん植えられていた。

天童寺には一七〇〇余年の歴史があり、中国の仏教名山古刹として禅宗五山のひとつに列せられている。広大な敷地に七〇〇もの伽藍を有し、仏殿・法堂・天王殿・先覚堂や七重の塔などがひときわ際立つ大きさである。

法堂に入ると、お約束通り五人の高僧のお迎えを受けた。大雄寺ご住職に託された多数の写経がみ仏の前に奉ぜられ読経が始まった。全員が輪袈裟をかけ、ひざまづいて合掌し礼拝した。長い長い読経であった。私は妻の遺影をそっと取り出し身の前に置き、こみあげるものを押さえながら礼拝を続けた。身のひきしまるような荘厳な雰囲気が堂内に満ちていた。

同行した何人かのご婦人が深い感動を受け涙したという話を後で耳にした。

「日本道元禅師得法霊蹟碑」の前を過ぎ応供堂（客殿）に通されると天童寺監院であられる修祥老師さまがお待ちであった。お話によると寺は洪水・火災・内乱などで六回も焼失し現在の姿になったという。文化大革命では強制的に農村に移され、一九八〇年に寺に戻ったときは三〇人の老僧だけで、そのうち現存しているのは五人しかいないそうである。修祥さまは大革命期を除いて四十八年間、監院になられてから二〇年を経ている七二歳のご壮健な方であった。

寺には通常五〇〇から六〇〇人の僧が住み修行・教化に励んでいるということである。日本の曹洞宗信徒が毎年数千人参拝に来ること。日本と中国の信者が交流を深めることが大切なことなど熱心に話されていた。

大雄寺の写真をご覧になって「かや葺き屋根で風情がありますね」とにっこりされた笑顔は仏様そのもののようであった。

同行した仲間が「来てよかったね」と話し合うありがたい参拝であった。

［浄慈寺］

五山のひとつに挙げられている名刹である。道元禅師の師如浄禅師さまのお墓は苔むした石段を登りつめた所に西湖を眺むようにひっそりと建っていた。一九八六年に日本曹洞宗から寄贈された大梵鐘を一人ひとり撞いて祈った。鐘の音は西湖に鳴り響いたことであろう。

［霊隠寺］

風光明媚な観光地として名高い西湖を眺む高台にある霊隠寺は、一六〇〇年前にインドの僧である慧理が開山した。五山十刹に列せられ、修行僧一二〇人を擁する禅寺である。想像を絶する広大な敷地を有し、寺の大駐車場か

らは歩いて二キロメートルもある。門前に停車しても長い坂道や石段を五〇〇メートルも息を切らせて登らなければならない。

大型駐車場から続く参道にはさまざまな土産物の売店が並んでいる。寺の特別許可を得ている私たちのバスだけが、曲がりくねったその参道をゆっくりと進み境内にまで乗り込むことができた。寺専用の木戸をくぐり抜けると、広場には数百人もの参拝客でごった返していた。

客殿に通され副住職に当たる慈舟監院から大雄寺様一行を歓迎しますとの挨拶の後、寺の説明を受けた。寺には、日本の僧侶が数多く禅を学びに来ることやご本人も十月には永平寺を訪れたこと。現在九十歳の老師は八十八歳の誕生祝いを日本で行ったことなど日本との交流の深さについて語られた。

霊隠寺も他の寺と同様、何度も興亡を繰り返したが、文化大革命の時は監院の知恵で、重要な品々を毛沢東の絵で覆ったので、国宝として紅衛隊が寺を守り破壊から免れることができたそうである。説明の最後に、本日は九十歳の老師が来るわけであったが所用ができたのでお詫びに記念として菩薩彫りをあげましょうということで大雄寺ご住職に贈られた。

寺を拝観すると天王殿・輪蔵殿・伽藍殿・法堂・五百羅漢堂など多くの殿堂がある中で、ひときわ高い大雄宝殿には金箔を貼った釈迦牟尼仏像が安置されていた。

私は、殷先生にお願いしておいた木彫りのお釈迦様を求めるために寺の売店に向かったが、同行してくださった慈舟老師さまがあれやこれやと手に取って見比べてくださり、希望する大きさの中から選んでいただくことができたので最高のおみやげになった。

[おわりに]

三十余国を旅し、中国も三回目になる私にとって、今回の訪中はひと味もふた味も違うものであった。五日間の旅でショッピングは友誼商店での一回のみ、それも僅か五十分。私の買い物は霊隠寺で求めたお釈迦さまと友誼商店で自分名を記入してもらった小さな飾り物と上海博物館で孫たちに買ったキーホルダー類だけであった。機内持ち込みのショールダーバックしか持たない私は、上海空港でチョコレートをたくさん買い込みバックに入れたが、それでも満杯にはならなかった。

しかしながら、心に残るおみやげは持ちきれないほど重く、そして大きかった。高僧のお話や参拝を通じて深く感じたことは、寺と信徒の信頼関係を深めることの大切さ、親に孝行をつくし、年長者を敬い、感謝し、奉仕する心、さらに思いやる心の大切さ。何かそれらを日本人は忘れかけているのではないだろうかと思いをはせる旅でもあった。儒教が人々の生活に深く根付いていることが感じられた。

上海での最後の夜に一言ずつ感想を述べ合う中で、異口同音に出た言葉は、「最高の出会い、最高の触れ合い、最高の雰囲気」であったことの喜びであった。

宗教関係のツアーを扱うことの多いアイティピーツアーズの企画もよかったが、最後に感想を述べられた殷先生のお言葉をお借りして「道元禅師を偲ぶ感動の旅」を結びます。

「道元禅師さまが中国を訪れなかったら、今回の出会いはなかったでしょう。これからも出会いを大切にしていきましょう。」

合掌

旅行記

東京都　石黒　由紀子

上海浦東国際空港からバスで寧波に向かう。その約五時間、車窓からの風景が、私にとってはじめて触れる中国…。なんとな〜く見た記憶がある古いタイプのクルマやトラックが力強く行き交う道路、洗濯ものを窓から外へ突き出すように縦に干す団地群、自転車にいっぱいの荷物を積み、一点を見つめて行く人、なにやら路地に集まっている子供たち……。中国といえば、黄河や万里の長城ぐらいしか連想できない私の小さな頭の中では、とてもゆったりしたイメージだったのだけど。気が遠くなるほどの悠久の歴史と、もはや測定不可能なスケールの中、それがなんだという様子で、人々は今日も暮らし営んでいるように見える。途中のサービスエリアで「中国のトイレ」の洗礼を受ける。ウワサ通りでかなりショック。寧波に着いた時には、バスの外はすっかり夜になっていた。この古い港町には、古都にありがちな重く錆びた感じがない。漂うのはむしろ、そこはかとない異国感。今日と明日の宿泊は寧波中信国際大酒店。夕食では、地元のビール『壹周』で乾杯。

二日目は雨。予定していた普陀山へ向かう船が欠航とのこと、ちょっとがっかり。船着場まで行ってみたが、状況は変わらず。乗船口にある黒板に「通知」として、〝雨と風のため停航〟と。霧の奥に、見えない普陀山をおもう。気を取りなおし、愛育王山広利寺へ。ここは、道元禅師が中国に来て最初に出会った老僧が、典座として修行を続けた天台五山の修行道場。仏舎利殿での特別な参拝の後、精進料理の昼食。「精進料理」というと、質素なイメー

ジがあるけど、こちらでは十八種類の料理が供された。素材を生かした調理法で、どれも美味しかった。スモークハムかと思って食べたら、実は『豆腐のおから』。「そう、精進料理なのでした！」と納得。

雪竇寺では、中国に来てはじめて犬を見た。道元禅師上陸の地を回り、ホテルへ。夕食までの間、地元のスーパーマーケットまで散歩した。

三日目、また雨。道元禅師が修行した天童禅寺に向かう。霧に煙る山をいくつも越えて行く感じは、まるで雲の間を登って行くかのよう。そのお寺は、深い木々の中に静かにおおらかに身を任せているような感じで、降っている細い雨がとても似合っていた。法殿での読経は、おだやかでやさしくて、全てをふんわり包み込むような深遠で不思議な力があった。これこそが癒し。とてもいい気持ち。

昼食後、西湖遊覧を目指し 杭州へ。交通渋滞のため、遊覧船には間に合わなかったが、雨も上がりすがすがしい陽が射す中、浄慈寺へ。道元禅師の師、如浄禅師の墓碑をお参りし、大梵鐘を撞かせていただく。その後、西冷印社へ。宿泊は浙江世界貿易中心大飯店。夕食後、足ウラマッサージに出かける。

四日目、快晴。靈隠寺へ。とにかく参拝人が多く、中国は仏教の国だとあらためて実感。寺院のしつらえが洗練されていて素敵。その後、龍井茶を購入すべく茶葉博物館へ寄り、大逆流を見るべく塩官鎮へ。「大逆流って？」と考えながらバスの中でお弁当。現地に到着してしばらくすると、はるか彼方から大規模な騎馬隊が野山を駆け降りてくるような音。と共に、波しぶきがすごいスピードで近付いてくる。おぉ、これが大逆流！ 潮の干満の差によって起きるという自然現象の迫力に唖然としつつ、上海へ。宿泊はウェスティン上海。夕食後は上海雑技団を観る。

五日目。今日帰ってしまうのがなんだか淋しい。上海博物館を見学後、空港へ。

いつもは、地図を片手に気を張って旅することが多いのですが今回は、アイティピーツアーズの入江さん、殷さん、沈さん、ご一緒させていただいたみなさんに身をまかせて、リラックスして心地よい温泉につかりながら旅をしているようでした。懐かしい方とお会いしたり、新しい出会いがあったり…。初日の違和感はときめきに変わり、あたたかな余韻が残る思い出の旅となりました。ご一緒させていただいたみなさんが、日々健やかでありますように。またお会いできる日が楽しみです。

大雄寺海外交流
曹洞宗開祖道元禅師
七五〇回大遠忌記念に参加して

田町　田中　英雄

十月二十一日雨の出発となったが、上海は晴れてくれることを期待して機上の人となる。

三時間後、上海空港に着いたが日本と同じ、やはり小雨交じりの空模様であった。この空模様は三日間続くことになる。

二日目、中国仏教四大聖山の一つで観音霊場である普陀山を目指したが、雨風のため高速船が出航できず残念であったが予定を変更し、阿育王寺を参拝しました。住持の界源老師たいへんな喜びようで熱烈歓迎、寺院内の案内、僧三名を交えての仏舎利殿での参加者全員による般若心経の読経、懇談の後精進料理の昼食をいただいて下山いたしました。

三日目は早朝ホテルを後にして天童寺へ。当寺も熱烈歓迎でした。早速修祥監院ほか四名の僧と参加者一同金箔の釈迦如来坐像の鎮座する仏殿で、持参した写経を奉納する法要を鐘、木魚などを交えて長い読経に心洗われる思いをいたしました。この読経中、中国人の参拝客も多数立ち止まって、じっと見つめていたのも印象的でした。

この度の交流で各お寺共に広い面積、そして大きな建物には驚きました。日本では東大寺位の家棟が一寺で大小五十棟から六十棟、多いお寺で六百棟とか。中国仏教一七〇〇余年、どのお寺も参拝者の人並みが続く信者の姿にも感銘いたしました。

最後に、この度の海外交流で特にお世話になったのが案内の殷勤先生でした。浙江省五つの寺院を訪れたのですが、事前の手配、そして高僧との懇談の通訳など、日本語には何不自由のない交流でした。誠にありがとうございました。

仏に導かれて

高根沢町　佐藤　英一郎

道元禅師上陸記念碑

寧波は古くから明州と呼ばれ、遣隋使、遣唐使が発着した港として、日本と結びつきが深い古都です。三交口河岸の公園に、永平寺が建立した立派な碑がありました。周囲には高層ビルが林立してしまい、当時を偲ぶものといえば満々と水を湛えた悠久の流れだけでした。

景徳寺跡

本堂だけが残り「道教」寺院になり、美髯の御神像が安置されていました。堂前の僅かな広場には数十の簡易食堂が雑然とできて、御神像は庶民の賑々しさを微笑してご覧になっているように見受けました。

阿育王寺

「手を伸ばせば届く目の真ん前に、

釈迦牟尼佛がおいでになる」高さ一メートルほどの宝塔に納められている仏舎利を拝し、しばらくは畏れと感動で震えました。生涯一度の貴重な体験でしょう。付属堂で昼食に精進料理を戴きました。道元禅師の船にシイタケを求めにきたこの寺の老典座との出会いが、仏道開眼のスタートになったとの倉澤住職さんの話を想いながら、長い歴史の重みある食の逸品を堪能しました。

雪竇禅寺

つづら折りの細い山道をバスで四十分ほど登りつめた山頂に、弥勒菩薩の本山であり智鑑禅師ゆかりの修復されたばかりの大寺院がありました。庭園の手入れも行き届いており、共産主義を超える仏教信仰の強大さを知りました。

天童禅寺

修祥監院ほか五人の僧が、私たちの納経法要を営んでくださいました。一七〇〇年の歴史ある寺院の、たぶん、道元禅師も読経されたことであろう法堂で、拝聴する読経のハーモニーの美しさに酔いながら落涙しました。

伽藍の偉容は、万里の長城や北京故宮に通じるものがあり、参拝者が溢れていました。文化大革命では住職の機智で堂塔、仏像に毛主席の肖像を張り巡らしたので、襲ってきた紅衛兵は手が出ず破壊を免れたと伺いました。羅漢堂で大雄寺の襖絵の羅漢さまの原版、石刻十八羅漢を拝観しました。異郷で知人に逢った懐かしさを覚えました。仏の導きと慈悲を全身に戴き至福の時を過ごしました。

浄慈禅寺

深い奥院にある如浄禅師墓塔に参り、倉澤住職の献花、礼拝の後、墓塔に触れたり、記念写真を撮ったり。畏敬の気持ち、温かで平穏な雰囲気が濃く漂っているのを誰もが感じていたと見受けられました。鐘楼堂では、日本から寄贈された大梵鐘を全員が撞きました。高低大小の鐘の音は、杭州「西湖」の夕空に広がっていきました。

霊隠寺（雲林禅寺）

寺院の高配でバスは特別の参道を走りました。参拝者が溢れる堂塔や広大な境内を、寺僧の案内を受け、寺内の喧騒をよそに静かに参拝できました。監院と懇談した折、座った豪華な木造漆塗りの椅子から離れ難くて少し遅れました。

西　湖

私の家は維新後東京に移住し、今は墓地、本籍だけが残っていますので墓参とお寺の行事には参加しておりました。住職様のお勧めで仲間入りし皆様の温かいご配慮を受けながら、高祖様所縁の中国寺院参拝ができました。仏縁の有難さをしみじみ感じております。

中国天童寺参拝の旅

馬頭町　五月女トミノ

大雄寺様と私の家の菩提寺が同じ宗派ということから、兄夫婦の好意で思いがけずこの旅に参加することができました。

この旅は、言葉で言い表せない程の感動と出会いを与えてくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。

道元禅師が上陸したという三江口をホテルの窓から眺めながら、昔、何人もの日本の僧がこの地を踏んだのだろうと思い、胸がいっぱいになってきました。

壮大な各寺院。それを守るかのように年輪を重ねて繁る樹木。何もかもが歴史の重みを感じるものばかりでした。

道元禅師が修行され悟りを開いた天童寺での法要は、本当に有難く、亡夫への思いを込めた写経が納められ読経が始まると、涙が溢れ、ただただ合掌しました。

四泊五日の旅でしたが、中国人の熱い信仰、逞しい精神、強い意志を垣間見ることもできました。

中国料理の奥深さと、人と人との触れ合うことの心地良さ、そして、普陀山は、「次の機会に」と期待を胸に、これからの生きる力を与えてくださった旅でした。

この企画の主催である大雄寺様、そして皆様にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

道元禅師七五〇回大遠忌記念の旅

今市市　高橋　正義

この度、大雄寺様のお誘いに預かり、曹洞宗の開祖道元禅師七五〇回遠忌記念の旅に参加させていただきました。道元の『正法眼蔵』を一度見たとき以来、曹洞宗が我が家の先祖から崇拝継承されてきたことを具体的に目で見たいと思っていました。こんな機会は二度とないと思い、参加する動機となりました。そして、いよいよ出発の日がきました。本当は、妻も一緒に行きたかったのですが、体調が悪いため、今回は私一人の旅となりました。

成田空港へ到着、待ち合わせ場所で全員集合。いよいよ一日目の出発となりました。

一日目

成田から上海、宿泊地の寧波のホテルへの空と陸との旅でした。上海空港では、今回のナビゲーター役を特別やっていただく日本語の堪能な仏教研究者の殷先生とガイドの沈さんの出迎えを受けました。

前後左右に広がる広大な大陸の中を延々

と五時間走り続け第一日目の宿泊地寧波に無事到着しました。夕食会は、倉澤住職様の挨拶、鈴木重幸様の乾杯で五日間の行程の無事を祈り、楽しい第一夜となりました。

二日目

早い朝食を済ませ、目的地普陀山へ行くためにバスに乗る。生憎天候不順で船は出ないとのこと。それでも一応普陀山へ出航する波止場へ行く。やっぱり中止とのこと。予定を変更して景徳禅寺の跡地を見学。道中樹木に白く塗料が塗られている奇妙な風景が見られ、聞いてみると、虫除け・照明効果のためだという。

阿育王寺に到着。お釈迦さまの分骨が入っている仏舎利を拝観、体が硬直する。

道元禅師の修行当時の椎茸にまつわる精進料理を戴いた。一般の参拝者が入れないところに、私たちは行ったり、見たり本当に仏冥利に尽きる有難いことであった。

雪竇寺へは、曲がりくねった坂道を左右茶畑を見ながら登った。道元禅師の師の如浄禅師の師である智鑑禅師が住職であった寺院とのこと。帰路道元禅師上陸記念碑のある三交口に寄る。昨夜と同じホテル寧波中信国際大飯店に泊まる。

三日目

今日も曇って今にも雨が降りそうな空模様だ。いよいよ今日は、今回の最大のハイライト天童寺での法要である。一七〇〇年の歴史を誇るに相応しい樹齢何百年も一千年もあろうと思われる松並木が参道となって続いていた。幾多の困難を乗り越えて現在に至っているという修祥監院や高僧様たちの荘厳、厳粛な大法要を行い写経を納経できた喜びは、生涯忘れられない出来事でした。

予定していた西湖遊覧は、交通渋滞で時間に間に合わず出来ませんでした。書画や印刻の西冷印社に行って、欲しかった掛け軸が買えてラッキーでした。今夜は浙江省最大都市、日本人観光客が一番多いという杭州市の浙江世界貿易中心大飯店の泊まりでした。

四日目

さすが四日目、納豆・海苔・漬物・豆腐汁が恋しい。早々に朝食を済ませバスに乗り込む。寺院の参拝も今日で終わりである。三十分程で霊隠寺へ到着する。覚乗監院様等の出迎えを受け接待室で懇談。ここでも一般参拝客が入れない場所に案内していただき感無量、慈舟知客様のご案内で境内を参拝。今まで行ったどの寺院よりも広大で、参拝客の数は日本のお正月の参拝客を思わせるような混雑でした。老若男女手に手にお線香を持って、仏様に向かって体を上下に大きく折り曲げ礼拝する姿は、とても日本では見られない光景でした。霊隠寺を出発、友誼商店に寄る。イギリスのエリザベス女王も飲んだと言う、手入りのお茶を接待いただき、お茶のお土産をたくさん買う。天気もやっと回復してきて、これから見に行く世界で二箇所しか見られない大逆流を見るため、塩官鎮に到着。とにかく大きい。川というより海。向こう岸が見えない。やがて遠くから白い盛り上がりが見えて来た。そして、近づいて来て、ザワーザーと聞こえたと思ったらあっという間に流れて行ってしまった。アッこれが銭塘江の大逆流だ。二、三分の出来事だった。最後の宿泊地上海へ、三日前走ってきた高速道路を爆走する。夜、名物の上海蟹を百万ドル夜景を眺めながら、ビールと紹興酒で美味しく戴く。腹ごしらえに上海雑技団の妙技に酔う。ホテル・ウエスティン上海に戻る。

銭塘江の大逆流

五日目

大遠忌記念の旅もいよいよ今日で終わりだ。最後の見学地上海博物館に行く。外国人客に混じり、日本人観光客も多く入っていた。見事な陶器、青磁器の色彩に見惚れる。さらに日本の縄文時代より古くから既に陶器を造っていて、高度な技術を持っていたことに驚かされる。そして、上海空港に到着。十四時三十分空路成田へ向け離陸。十七時四十二分、全員元気で無事到着目出度し。

本当に素晴らしい感謝、感謝、感動の五日間でした。大雄寺様はじめ、アイティピーツアーズの入江さん、現地での殷先生、ガイドの沈さん、薫さん、各寺院僧侶の皆様そして、ご一緒の二十一名の皆様本当にありがとうございました。たいへんお世話になりました。このご縁を機会に今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

大雄寺海外交流
曹洞宗開祖道元禅師
七五〇回忌記念
中国天童寺参拝に参加して

前田　大嶋　瑞恵

記念行事の一つとして、道元禅師様修行の地、中国天童寺参拝旅行が催されることを知ったのですが、「知力」「財力」「体力」に乏しい私、諦めていました。ふとしたことから「百聞は一見に如かず」の言葉に勇気付けられ、参加者の一員に加えさせていただくことになりました。

道元禅師様は、博多から船で中国寧波に着き、入国許可が下りず二ヶ月以上足止めされましたとのことですが、私たちは大雄寺を出発して、成田・・・上海・・・寧波、十五時間経て到着。古を想うと嘸、難儀されたことでしょう。

二日目朝から雨と風、ホテルのロビーに集合すると、普陀山行きの船が出ないとの情報がありましたが、バスの乗車船着場へ、雨は降っていませんでしたが風が吹いて高速船は欠航とのこと。残念。

普陀山は、五台山・九華山・峨嵋山と並ぶ中国四大仏教聖地観音信仰の霊場で、普済寺、法雨寺、不肯去観音院等を参拝する予定でした。

二十分位船着場にいますと、次々とバスが到着大きな荷物を持った現地の人達が船に乗り込んでいますので、ガイドさんに聞きますと、普通船は出航するが長時間かかり帰りの便はどうなるか分からないとのこと。片道四時間、往復だけで参拝する時間が無く、帰りの便の保障もされない。これでは行っても無駄である。代わりに阿育王寺、雪竇寺参拝に変更。阿育王寺に到着、まず目に入った大きな池、池というより黒羽町民プールの如く広大な池。お寺の建物も大きく立派、幾つか棟を越し「遊客止歩」（これより通行禁止）と記されているところを横目に奥へと歩き進める。階段をいくつも登り靴を脱ぎ上履きに替えて着いたところは仏間、金色の輝く須弥壇の前へ、「オーオー」感嘆の声が漏れました。

大雄寺住職様のお唱えする般若心経に合わせて全員合掌礼拝、清らかな堂内にお経が香と共に満ちてくるのを感じ高窓から小雨に煙る、中国独特な伽藍の屋根や塔、松の大木の枝葉を望む。仏舎利（お釈迦さまの分骨）を特別にお参りすることが許されました。一人何分などと時間に制限されることなく順次拝観、貴重な体験をさせていただきました。

精進料理を戴き、仏舎利特別拝観、写真撮影を許され、極めて少数の人しか近寄れない崇高な所に入ったこと感動の連続でした。

再びバスに乗ってエンジン音を響かせ九十九折の山道を登ること一時間強、折々眼下に拓く街並みを眺めながら、雪竇寺に到着。目の前に普代古刹と記される門前を通り、天王殿、弥勒宝殿、大雄宝殿、大きな釈迦牟尼仏、阿弥陀如来、薬師如来、観音菩薩などたくさん並んでいました。一つ一つお顔を、衣を、手を、蓮華座を拝していると時の経つのも気づかず、振り向けば見知らぬ他国の人ばかり、大勢賑やかで混雑から離れるといつの間にか特別の人達しか入れない聖域にいるのでした。雪竇寺は、道元禅師の師匠、如浄禅師の師匠智鑑禅師のお寺とのこと。庭に大きな白果樹（銀杏）の古木が左右にあり、歴史を感じました。

阿育王寺と雪竇寺と参拝して高僧の出迎えや堂内案内、お茶のご接待、仏舎利お参り、そして懇談など一人歓びに陶酔しました。般若湯を戴いたわけではありません。

大雄寺住職様、中国仏教会殷勤先生のお力添えがあってこそ、素晴らしい交流ができましたのだと思います。そして、住職様と殷勤先生との素晴らしい繋がりがあったことが参拝がスムーズに進み、歓迎をされたのだと思います。

天童寺参拝の旅実施される事前説明会が月光館でありました。同行していただいた殷先生も永平寺に所用で日本におられましたので、この説明会にいらっしゃいまして、詳しく説明していただきました。日本語もたいへんお上手で、聞きやすく礼儀正しい方でした。中国に着いて五日間ご一緒して案内していただき、詳しく説明がありましたので本当に貴重な体験をすることができました。

このような参拝旅行などに多くの方が参加されますことをお勧めいたします。

中国天童寺参拝の旅感想

栃木市　池森　一郎

この度大雄寺住職様のご努力と杭州市仏教協会副会長の殷先生のご縁で中国五千年の歴史をもつ中国思想の一つである仏教、特に日本の禅宗に最も縁のある曹洞宗開祖道元禅師七五〇回大遠忌記念として大雄寺海外交流中国旅行に参加させていただき、誠にありがとうございました。

中国での仏教に対する民衆の信仰心の深さが、第一印象に強く感じられました。実は、私の脳裏には中国仏教よりも歴史の古い儒教、道教の思想が根付いていて、儒教より新しい仏教が民衆に深く広がっていないと思ったからです。その上、第二次世界大戦後革命家毛沢東の共産主義政治に変わり、宗教は国策で抹殺され宗教はないものに等しい状態になっていると思っていました。

その後プロレタリア文化大革命により仏教等は再び排除されたと思っていました。

私の中国における勉強不足もありますが、しかし、今回の旅行で現実に見た中国仏教と経済の発展には驚きと同時に、感動の世界に私を導いてくれました。

特に、寧波の地で唐の時代に一人の日本僧道元禅師が、真の仏教を知るため上陸した記念碑の前に立った時、私は当時の道元禅師の仏教に対する研究心に感動し、以前に増して禅師のなお一層の信者の一人になりました。

阿育王禅寺で私の脳裏に浮かんだことは、禅寺の典座係の老僧と寧波の港で道元禅師との会話を思い出しました。阿育王禅寺では、中国人でもめったに拝見することのできない仏舎利を見ることができ感無量でした。私はこの世に生を受け一生に一度の出来事であると思いました。

天童禅寺には、一七〇〇年の歴史が

あり、境内は仏教寺院の雰囲気があり、修行する寺院であるに相応しい場所と思いました。道元禅師が如浄禅師によって人生の一大事を悟った場所と聞いて感動いたしました。

浄慈禅寺では、如浄禅師の墓前で在りし日の道元禅師と如浄禅師との師弟の姿を思い浮かべ、師弟の尊さを感じました。永平寺からの梵鐘の寄進がり、その梵鐘を打つことが出来幸せでした。鐘の重さは、一〇八トンとのこと、人間の煩悩の数も一〇八とのこと。私たちこの鐘を撞いたことで煩悩が消滅したことでしょう。

塩官鎮では世界で二箇所しかないと言う大逆流を見て、中国の河川の広大さと同時に自然界の偉大さを体験し、ここで中国の革命家毛沢東が一九五七年九月にこの河川の大逆流を見学に来たとき書かれたと言う詩碑が河岸の堤防にあり、この碑は毛沢東の政治権力の最高の頃のことと思います。詩文の内容は、武力闘争の革命家らしく逆流の勢いを見、その逆流を騎馬軍と見立て一気に押し寄せ帝国主義者の敵をなぎ倒すという武力革命家らしい文面が書かれていました。中国歴史の一辺を垣間見る思いでした。

杭州西冷印社は九五〇年の歴史があり中国ならでの江南様式庭園と楼閣の古風さ二〇〇〇年近く前に彫られた碑文があり、感心いたしました。西冷印社の頂上から見た西湖の風景は、日本では見られない中国自然美を楽しみました。

霊隠禅寺では、老僧の歓迎を受け慈舟知客の案内で境内を見学し、仏像の偉大さと信者の参拝の多さに感心し、民衆の仏教に対する信仰の深さを感じさせられました。

最後の夜は、上海和平飯店の夕食会で上海カニと中国料理をいただき、料理には欠かせない紹興酒は上戸の私には心ゆくまで楽しみました。

最後日は上海博物館では古代芸術品の数々を見学し、特に私の好きな菩薩様如来様などの仏像と唐王朝時代の白青磁香炉、彫刻など当時の造形活動技術のありさまがつかめたような気がしました。

次回中国に行く機会がありましたら十分時間を掛けて見たいと思います。

最後にこの度の旅行には何一つの事故もなく無事帰国したことは、大雄寺住職様はじめ殷先生ならびに皆様のあたたかいご指導とご協力によるものと思い感謝いたしています。

今後ともよろしくお願いします。

合　掌

道元禅師修行の地に立って

大田原市　足立　セツ子

大雄寺主催の海外交流事業「中国天童寺参拝の旅」に参加させていただき、感謝の日を過ごすことができました。上海は二度目でしたが高速道路の民家が前回とは少し変わったかなと感じつつ目的の寧波に着きました。

翌日からの三日間のお寺参りは、充実したものでした。

数多くの伽藍に囲まれた阿育王寺の本堂に参加者全員が二人の僧の案内で礼拝を行い大雄寺の住職様の凛とした般若心経が響きわたり厳粛な時を過ごすことができました。

その後三十センチ位の塔の中に納められた仏舎利を一人ずつ覗いて見ることができ、皆さんも静かな感動があった様子でした。

殷さんの手配がよろしかったのでしょう。その後にいただいた昼食の精進料理の品数の多さに驚きました。

厨房は古いタイル張りで薄暗く、質素な場所でしたが出された食事はどれも手を掛けたもので、小麦粉や大豆、野菜、果実など工夫を凝らして料理していました。味がどれも私の口に合うことが不思議でした。特に道元さまとの出会いのエピソードにもなっている椎茸はしっかりと旨みのきいた味付けになっていておいしかったです。

蒋介石の故郷に建つ雪竇寺では観音様の霊山を一度にお参りすることができました。

天童寺の広さ、建物の多さに驚きながら接待の間に入り、お茶や果物、飴などをいただきました。深とした中に言葉では表せない落ち着いた雰囲気がありました。そこで、お寺や道元禅師についてのお話を聞き日本とのつながりや禅宗についても理解が深まりました。

本堂での法要が五人の僧侶の方の読経により行われました。私たちも礼拝の後、輪袈裟、合掌の姿で参加しました。ゆったりと流れるような読経の中に身を置き、亡き夫、義父、義母、義姉、義妹の名を呼んだ時、悲しいわけではないのに、静かに涙が流れました。流れるままに読経を聞くうちに心の平穏が得られたように思いました。

ひっそりとして、しかも幽玄に佇む如浄禅師のお墓も永平寺から贈られた鐘の音も心に残りました。

霊隠寺の参拝人の多さに目をみはりました。中国の方々の信仰に対する姿勢を見た気がいたしました。

今年は亡き夫の十七回忌、図らずもこの時にこのような参拝旅行ができた

ことを嬉しく思います。いろいろご配慮くださった大雄寺住職様やお世話になった参加の皆様、殷さん、旅行社の入江さんに深く感謝申し上げます。

中国への旅

前田　新江　彰

最後の晩餐は上海の和平飯店だった。上海浦東空港に着いた二十一日から数えると四日目である。その日、宿となった上海威斯汀大飯店に夕刻到着して、それぞれ荷物を部屋に落ちつけ、再びバスに乗り夕食の待つ和平飯店に向かった。

上海の通りは混雑していた。日本より遥かに少ない筈の車がここでは車道にギッシリ詰まって、歩道はザワザワと人の波でごった返していた。人と人との間をくぐり抜けるようにして歩き、飯店に入った。

用意されていた二卓の丸テーブルの前に二十三名が分かれて、円くなり椅子に腰を下ろした。部屋の中は一瞬、静けさがあった。

良裕住職の挨拶の後、一同で乾杯した。

宴席の飲み物は、紹興酒と中国ビールで本場の上海料理を堪能した。中でも名物上海蟹はアイティーピーツァーズ・入江女史のお勧めだけあって、さすがに美味で舌鼓を打った。

簡単な自己紹介をしたりしながら談笑は尽きなかった。

大雄寺開山以来、初の海外交流旅行が仏教伝来の地である中国への旅となったが、御仏のご加護のお陰で無事、明日終わろうとしていることを思うとき、参加者の一人として感無量の念を禁じ得なかった。

天童寺をはじめ由緒ある数寺院の参拝や各寺院での熱烈歓迎、さらに住職様の高貴な説法、上海博物館の観覧など、心の糧を盛りたくさん頂戴したような気がする。

今回の中国旅行は、私どもの日常生活にある漢字をはじめ、食分野の中での身近な豆腐やアイス・クリーム等に至るまで、数え上げたら切りがないほど中国文化がその昔、はるばる渡来して日本の文化に多大な影響を及ぼし続けてきたことを一層深く再認識できた歓喜の旅でもあった。

中国天童寺参拝の旅で知った身近な事柄

●中国の行政区分
中国の行政単位は日本と異なり、「国」の下に浙江省のように「省」や「自治区」また北京市や上海市などの「直轄市」や「香港特別行政区」がある。
浙江省の中には杭州市や金華市のような「市」が７市と麗水地区という「地区」が１つあります。金華市の中には浦江県のように「県」が４県、浦江県には９つの「郷」と７つの「鎮」があり、集落の規模によって「村」「庄」があります。

●日本にあって中国にないもの。
パチンコと自動販売機。パチンコについては、中国では賭け事が禁止されているため。
マクドナルドは盛況であるとのこと。

●全ての土地は国のもの。個人は土地を売買できない。土地の上に建つ家は、所有権がある。空港や高速道路が容易に建設できる。

●月給が８００元（１元＝１６円）以下は免税、上海のサラリーマンは税金を払っていない。

●トイレ事情、市街地やホテルは最新の設備であるが、郊外や寺のトイレは、戸がないことや隣との仕切りがなくお粗末である。ホテルで戸を閉めずに使用する現地の人に居合わせた。恥じらいがないのであろうか。

●寺院の住職任命について、仏教会において僧侶の力量や教化布教活動、信用、人柄などを鑑み推薦、行政の宗教局と協議の上選任される。

●日本には檀家制度があるが、中国にはない。信徒が仏事をお願いするには、信じているお寺へお参りしてこれを行うとのこと。

●寧波について
繊維（シルク）や井草が産地。日本の畳の半分は、中国製でその９０％は寧波の物。
唐の時代は、明州と呼ばれ、１９回の遣隋使、遣唐使の発着の港として有名。
道元禅師の時代は、貿易港として栄え、日本からの輸出品は漆や蒔絵や椎茸や日本刀などであった。
一方、青磁、お茶、シルクなどを輸入。
寧波から阿育王寺へ行く街路樹は水杉。木の下を白く塗ってあるのは、石灰をぬってあり、３つの効用があるようだ。
　１．虫がつかない。　　２．見た目が暖かい。　　３．ライトが当たると光る。

●天童寺について
１７００年の歴史がある。その間には、洪水や水害、戦争、文化大革命と６回破壊された。
羅漢堂にある石版の十八羅漢は、文化大革命では破壊されず免れた。説明によると、石版に漆喰を塗って見えなくした。

道元禅師の生涯　道元禅師ものがたり

し、禅師のこの基本的な問いに答える人はなく、十五歳頃、禅師は比叡山を下り、三井寺（みいでら）の公胤僧正（こういんそうじょう）を訪ねて、教えを請われました。公胤僧正は、直接的な解答を与えられませんでしたが、天台宗の僧であると同時に、中国より禅宗の教えを伝えられた、建仁寺（けんにんじ）の栄西（えいさい）禅師を訪ねるようにといわれました。そこで、禅師は、建保五年（一二一七年）、十八歳のとき、建仁寺を訪ね、栄西禅師の高弟、明全和尚（みょうぜんおしょう）の弟子となり、栄西禅師が伝えられた臨済宗（りんざいしゅう）の禅を学ばれたのでした。

●幼少のうちに両親と死別

道元禅師は、正治二年（一二〇〇年）正月二日、父、内大臣久我通親（こがみちちか）の館で、摂政関白藤原基房（ふじわらもとふさ）の娘を母として誕生されたと伝えられています。禅師は貴族の名門に生を受けられたわけですが、三歳で父を、八歳で母を亡くされました。父の死後は、母方の叔父、摂政関白藤原師家のもとで、後継者としての養育を受けられていました。しかし、幼少のうちに両親と死別し、世の無常を深く悟られていた禅師は、政治の道を歩むことを好まれず、建保元年（一二一三年）、十四歳で比叡山に登り、出家・得度されました。

●天台の教えへの疑問と禅との出会い

天台宗の基本的な教えは、人は生れながらにして、そのまま仏であるというものですが、禅師は、それではなぜ修行しなければならないのかという疑問を抱かれるようになりました。しかたある日、一人の修行僧が坐禅中に居眠りしているのを如浄禅師が見られ、一喝して、「参禅は、身心脱落（しんじんだつらく）なり」とおっしゃいました。禅師は、「身心脱落」という言葉を聞いて、大きな悟りの境地を得られたのです。

●身心脱落の境地

「身心脱落」とは、身心があらゆる束縛から解放されて、絶対の自由を得たということです。そして、凡夫が小さな自我を捨て、身心が脱落したとき、仏そのものになりきっている。その仏が坐禅しておられるのが、禅の修行である。そう悟られたとき、人は生まれながらにして仏ならば、なぜ修行しなければならないのかという、禅師の比叡山以来の疑問がすべてとり払われたのでした。すなわち、人は仏性をもっているからこそ修行ができ、修行できることが仏性のある証拠なのです。安貞元年（一二二七年）に帰国された禅師は、「眼横鼻直（がんのうびちょく）」「空手還郷（くうしゅげんきょう）」といわれました。身心脱落とは、眼は横に鼻はまっすぐあるのと同じで、ありのままを自覚したまでで、手ぶらで帰ってきたと・・・・・・。

●永平寺の建立と「正法眼蔵」

天福元年（一二三三年）、禅師三十四歳のとき、京深草（ふかくさ）に興聖寺（こうしょうじ）を開かれ、日本で最初の正式な僧堂（禅僧の修行道場）を造られました。また、禅師は「正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）」を書き始められました。しかし、比叡山をはじめとする既成宗団の圧迫を受け、興聖寺も焼失し、寛元元年（一二四三年）、禅師は越前に入り、翌年、大仏寺を建立されました。この大仏寺が後に永平寺と改称され、禅師は、ここで門弟の教育と「正法眼蔵」の完成に専念されたのですが、建長五年（一二五三年）、病いに倒れられ、京での療養中、五十四歳のご生涯をとじられました。

道元禅師は、一二〇〇年（正治二年）京都に生まれ、一二五三年（建長五年）に亡くなられました。五十四歳の生涯です。

五十四年の生涯を振り返りますと、十四歳で得度、二十四歳中国に留学、三十四歳京都宇治の興聖寺を開創、四十四歳京都を去り越前（福井県）に入りました。

道元禅師二十四歳の時、長い間計画を練っていた中国留学を師の明全和尚と一緒に敢行しました。

博多の港から寧波（ニンポー）の港に着き、直ぐに入国許可が下りず二ヶ月以上船中に足止めされました。

この間中国語の勉強などし、阿育王寺の老僧に出会い有意義な日々を送くられ、入国許可がでて天童寺において如浄禅師の下で仏道修行に励みます。

二十八歳帰国し「普勧坐禅儀」を著し、坐禅がどんなに素晴らしいものかを説

いております。

道元禅師に深く帰依していた波多野義重公の所領地、越前に移り「正法眼蔵」の著述を精力的にすすめ、永平寺を開創します。

五十四歳体調を崩され、永平寺を懐奘（エジョウ）に譲り、病気療養のため京都へ上り八月二十八日亡くなられました。

一、阿育王寺の老典座との出会い

阿育王寺という寺の和尚様がシイタケを買いに船に来られました。この和尚様は六十一歳の老僧、「典座（テンゾ）」という役目であります。これは炊事係という意味です。この老僧が、二十キロの道のりを歩いてそれを買いにきたのです。道元禅師が初めて接する中国のお坊さんです。

ですから、修行とはいったいどういうことをしたらいいのか、どういう勉強をしたらいいのか、この中国のお坊さんからお話を聞こうとしました。それで船の上に丁寧にお招きして、会話は出来ないから筆談で、いろいろお聞きしようとしたわけです。

そうしましたら、自分は食事係だと。自分は阿育王寺のお坊さんたちにおいしいものを食べてもらいたい。同じうどんを作るにしても出汁をちゃんと作りたい。それで買いにきたんだと。道元禅師は、炊事係としてシイタケを買いにくるようなことが修行になるんでしょうかと聞いたわけです。そうしましたら、こうおっしゃったのです。自分は老人でこの職を務めているのは、老人としての修行をしているのであり、どうしてこれを他人に譲れましょうか。自分は老僧としての修行をしているんだと。

道元禅師はまだ分からず、道元禅師は修行というと、禅の本を読んだり、坐禅したり、お経を読んだりすることだと日本で植えつけられている。それで、えーっ、炊事係の仕事をするのが修行なんだろうかと。それでこう尋ねました。「どうして坐禅、弁道をしたり、古人の文字、お経、そういうものを見ないのですか」とお尋ねました。すると、その老僧が、「お前さんは外国の立派な人のようだが、まだ修行ということも、文字を見るということもわかっていない」と言われました。このようなことをまず中国留学で最初に経験しました。本当の修行とは何かというのが分からない。どうしてあんな六十一歳の立派な和尚さんがシイタケの買い付けに来るのか。それが分からない。

二、天童寺の老典座との出会い

天童寺での修行生活で衝撃的なできごとがありました。

ある夏の暑い日に、老僧が体を弓のように腰を曲げて石畳の上にキノコを干している光景を見て、若き道元は、老僧に年齢を尋ねると、六十八歳だと。「そんなお年なら、だれかに手伝わせたらどうですか」と言われました。老僧の答は「他は是れ吾にあらず」。意味は、自分の修行はどこまでも自分の修行だ。だから他人にこの仕事を任せたのでは他人の修行になっても自分の修行にはならない。自分の修行は自分でやることだ。

尚も尋ねる、こんな暑い日中にやらないで、もう少し涼しくなってからなさったらどうでしょうかと、すると老僧はすかさず、「更に何れの時をか待たん」と答えました。今やっているこの仕事は今の仕事だと。その今の仕事を明日やればいいと延ばすことはできない。明日やればいい、明日できなければ明後日やればいいと。ところがこの老僧は、人間はいつ死ぬか分からない。あす死ぬか分からない。だから仕事を延ばすということはできない。今の仕事は今やらなければいけないと答えたのです。

道元禅師はハッと気付かれ、修行というのはいったい何か。人間というのはいつどうなるか分からないものだ。だから今生きているときには今の仕事をしっかりやっておくことだと悟ります。

三、帰国後の第一声

禅師は二十四才のときに中国に留学され、如浄禅師に学ばれて一大事を悟りました。

そして二十八才で帰国されたとき、帰国の第一声が、「眼横鼻直」（がんのうびちょく）「空手還郷」（くうしゅげんきょう）と言われました。

経典や仏像などは持ち帰らずに、ただ一つ「目は横に、鼻は縦についていることがわかって、空手で帰ってきた」。読んで字の如く、眼は横に並んでいる、鼻は縦についている、というものである。何だ当たり前ではないかと言われそうですが、当たり前でいいのです。

佛教や禅というと私達は特別のものとして、かまえてしまいます。それではなくて、肝心な自分の足元を定め、日常生活が真剣な修行としてなされるならば、そこにこそ佛さまになる道が開けてくるというものであります。

言葉を変えて説明するのであれば、禅の修行は食事をすることも、風呂に入ることも掃除洗濯もすべてが修行であると示します。

日常生活が真剣であれば、すべての人が宿している佛さまの種が芽を出し育ち花開くのであります。種を蒔かなければ、収穫はないのです。

仏道を習うというは、自己を習うなり。自己を習うというは、自己をわするるなり。自己をわするるというは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるというは、自己の身心、及び他己の身心をして脱落せしむるなり。

春は花夏ほととぎす秋は月
冬雪さえて冷しかりけり

平成十四年の思い出

境内に
蓮の池を造成

平成十四年寄付芳名単

黒羽町　八溝園様　茨城県　篠崎　隆様
宇都宮市　株式会社ミツトヨ様　大田原市　弓座　勝利様
黒羽町　礒　信一様　宇都宮市　生田目善司様
大田原市　遠藤　茂様　宇都宮市　渡辺　茂子様
杉並区　津田みつ子様　黒羽町　伊藤　年郎様
黒羽町　田中　英雄様

平成十五年の予定

① 第三回檀信徒研修会実施
② コンサート実施（胡弓演奏予定）
③ 宝物収蔵庫「大雄寺集古館」工事着工

平成十五年の行事

一月一日より	初詣
二月二日	節分会
三月十八日～二十四日	春彼岸会
五月一日より	牡丹開花
五月八日	花まつり
五月十日	コンサート開催
六月八日	大般若法会
八月十三日～十六日	盂蘭盆会
九月二十日～二十六日	秋彼岸会
十月一日	大施食会
十二月十八日	観音祈願法会
十二月三十一日	除夜法会

大雄寺で開催している講座
参加してみませんか！

●日曜坐禅会
毎月第２と第４日曜日　午前７時30分～９時まで
坐禅・作務・茶話　初めての方歓迎

●ご詠歌教室
毎月第２と第４水曜日　午後１時30分～４時まで
矢板市　瑞雲院住職様が優しく教えていただけます。

●婦人読経会
毎月第１火曜日　午前８時30分～９時30分まで
読経・法話・茶話

●写経の会
毎月第１火曜日　午後２時～４時まで
静寂の中経文を写す行です。気軽にご参加できます。

※ 詳しくは大雄寺にお問い合わせ下さい。

大雄寺ホームページ

詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載
ＵＲＬ　http://www.daiouji.or.jp/
E-mail　ryoyu@daiouji.or.jp